

平成 22 年 3 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19500511
 研究課題名（和文）身体性・スポーツ文化の本質特性～北米ネイティブの物語を参照系として～
 研究課題名（英文） A critical adaptation for a lived-body and sport culture through popular Native American stories as a frame of reference.
 研究代表者
 山口 順子 (YAMAGUCHI JUNKO)
 津田塾大学・学芸学部・国際関係学科・教授
 研究者番号：70055325

研究成果の概要（和文）：北米ネイティブの身体性やスポーツ遊戯に関わる物語には、自然観のみならず、部族間の信念対立から生じる戦争回避の知恵を含むものがある。また、世界説明としての語りや物語の結末が、時代や地域・部族ごとに異なる点に注目すると、そこには共同体の意味をめぐる問題（イデオロギー性）、エスニシティの強化意識も浮上する。物語にみられる自然観・身体観とともにスポーツ文化の本質特性が検討される。

研究成果の概要（英文）：This study explores the basic nature of a lived-body and sport culture through popular Native American stories as a frame of reference, in that we see the ideas and understanding of past generations, which handle deep and serious themes such as avoiding a war in an amusing way.

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、身体教育学

キーワード：身体性哲学、スポーツ哲学、身体教育学、パフォーマンス、環境世界内存在

1. 研究開始当初の背景

本研究者は、これまでの研究において、北米ネイティブの生の営みの中に、部族間の信念対立から生じる軋轢や相克を回避する知恵が、とくに現在のラクロス(lacrosse)に繋がるボールゲーム（The Great Ball Game、球

戯神話）の中に見出せることに注目していた。さらに、北米ネイティブの世界説明の仕方に、西欧哲学に類似するメタレベルの視点が包摂されていることにも関心を寄せていた。そこで北米ネイティブの身体性や、スポーツ、

パフォーマンスの形式が、共同体の価値規範の体現としてどのように使われているか、またアイデンティティの形成がどのように行なわれているか、スポーツ文化の現地調査を行う構想が生まれた。それは異文化理解に留まらない、人類が創り出したスポーツ形式の根源的な意味の探究である。

2. 研究の目的

北米ネイティブの中に継承される身体性・スポーツ文化の原初的な世界説明の物語（意味の参照系）を比較検討することによって、「主体的に生きていく身体 (lived-body) がもつ特性」並びに「スポーツ経験の中に体現される価値規範のあり様」を検討することである。スポーツの語は、ここでは語源 (dis+port) に依拠し、「遊戯性」を含むプレイ、ゲーム、スポーツからダンス、ドラマ、儀礼等のパフォーマンスまでを含んでいる。

3. 研究の方法

第1に、北米西海岸と東海岸において、地域ごと、部族ごとに、時代を超えて語られる身体性とスポーツ文化に関わる物語を発掘し、比較検討する。第2に、60年の歴史をもつノースカロライナ州チェロキー族の野外ステージにおけるパフォーマンスを取りあげ、集団のアイデンティティ強化の事例研究を行う。第3に、研究成果は、国際スポーツ哲学会、国内外でのスポーツ哲学・人類学会で、段階的に発表する。

(1) 現地調査

初年度は、北米西海岸沿いのワシントン州、オレゴン州、大陸中部のアイダホ州、そして2年目は、東海岸のノースカロライナ州とテネシー州の境にあるチェロキー地区での資料収集と現地調査を実施する。□

(2) 物語の共時的・通時的比較

①北米ネイティブの身体性・スポーツ文化

に関わる文献資料を訳出する。②「共時的」考察は、北米西海岸と東海岸の限られた部族の比較検討を行うことによって、身体性の本質特性を概観する。さらに、③スポーツ形式の共時的・通時的比較には、異なるバージョンの「球戯神話」を扱う。

(3) イデオロギーの解釈コードの抽出

身体性・スポーツ形式に関わる物語の浸透性、即ち、自らに起きたことや人生に与える意味をめぐる問題（物語のイデオロギー性）の解釈コードを抽出・検討する。

4. 研究成果

(1) 2007年8月、北米西海岸から中西部の保留地で、ネイティブ自身が運営する博物館、図書館、教育文化センターを中心に現地での資料収集を実施した。ワシントン州は、1) Squomish Reservation Museum, 2) Klallam Tribe Library, 及び、Jamestown S' Klallam Tribe Artwork Enterprise, 3) Chehallis Reservation Cultural Center, 4) Makah Cultural and Research Center, 5) Yakima Nation Museum, Cultural Heritage Center の5カ所、オレゴン州は、6) Tamastlikt Cultural Institute、アイダホ州は、7) Nez Perce Reservation Museum である。7) の Nez Perce 保留地区の博物館は、国の機関と部族の共同運営であり、それ以外の機関は主にネイティブ自身の運営である。なかでも Makah, Yakima, Tamastlikt 族の博物館は、近代的な建物であり、部族の歴史、生活文化、ダンスや音楽・映像、書籍、資料のアーカイブ化とともに観光客も多く活性化していた。現地でのインタビューも含め調査した結果、西海岸沿いはトーテミズム思想による捕鯨と鮭漁に関わる物語が中心であり、「球戯神話」等、スポーツ形式のものは皆無であった。このことから

「球戯神話」は、北米東海岸や中央部に定住する Cree, Blackfoot, Cheyenne 語などを含む、アルゴンキン (Algonquian) 語族のものであり、それはまた、西海岸沿いのトーテムズムとは大きく異なる自然観、身体観をもっていると推定された。

ところで球戯神話の物語とは、「空を飛ぶ鳥」と「地上の獣」の戦いである。両者は世界観の違いから諍いが絶えず、争いはいつも戦争になるほどの勢いであった。そこで戦いを回避するために、空の、鳥のキャプテンがボールゲームで決めようと提案すれば、地上の、獣のキャプテンがそれに同意し、生き物たちが集合し試合が始まる。ありとあらゆる生物が集合し、試合は真夜中まで続く。闇夜の中で、倒れる者も出る中、他者への気遣いも描かれる。明らかに鳥の「俯瞰的な視線」と獣の「実存的な視線」という、人間界のメタフィジカルな「意識・まなざし」の示唆である。しかも、試合の結末は、鳥でも獣でもない、そのどちらの種にも所属さない両義的な存在（例えば、暗闇でも活動できるコウモリ）が、いずれのチームに入るかで勝敗が決まる。多様な生き物が出場する世界は、空か大地かの二者択一の「実体論」の見方ではなく、相互依存を考慮する「関係論」の見方から構築されている。また、あらゆる生物を大切にすることは、自らを大切にすることであるという生態系の有機的連鎖の世界認識が呈示されている。地域ごと、時代ごとに勝敗が異なる物語からは、なぜ結末が異なるのかという意味をめぐる問題（イデオロギー性）が指摘される。

(2) 物語の共時的・通時的比較

主体的に生きている身体を直接的に扱う物語は少ないが、西海岸ワシントン州最西端のマカー族には、川の急流で生まれ、海に泳ぎ出て、数年後にまた産卵のために戻ってく

る鮭を人格化し、部族のチーフとして迎える話がある。そこでは、捕獲後に鮭がもどれるように骨は綺麗に洗って水場に置いておく有機的世界が語り継がれている。また、同州の Sequim 町にある Jamestown S' Klallam 族のトーテンポールの製作所では、「世界が凍りついて食料がなく何年も飢餓の状態が続いていた頃に、気温が上がり始め、氷が溶け出して世界が洪水となり、人びとが絶望的になった時、川に鮭が現れた」という神話が壁に添付され、大きな丸太からトーテムの彫刻が切り出されていた。当該地域の重要な概念は「対称性」、「意味性」、「有機的自然性」であり、鮭や動物の対称性の図柄は、公共の建物の壁面、小物入れ、スカーフなどのデザインにも使われ、観光客にもよく知られる。

左右対称の二世界把握は、陰陽の自然観にも通じる。即ち、そこには天と地の相克ではなく、二つで一つの世界認識が表現される。技の習得の仕方にも特徴がある。Sharlen and Ted Nelson (2003, *The Makah*,) によれば、ワシントン州海岸沿いに住むマカー族のかつての捕鯨者たちは、鯨がやってくる前に、神秘的な精神世界（魂）に入るための練習を行なう。捕鯨者たちは人目につかないように隠れたプールで、何度も、ただひたすら泳ぎ、ゆっくり潜り、それから水面上にうねり出るといふ鯨が塩を吹き出す動きを真似て水に潜ることをくり返し、鯨そのものに「成りきる」（同化する）ことで、捕鯨者の銛に鯨が降伏すると信じていた (2003, p.20.)。また漁の日、それぞれの捕鯨者は、海岸から七人の乗組員がカヌーを押し出し、日の出前の暗いうちに星をたよりに海にこぎ出る。漁師の妻は、鯨が海岸に静かに到着できるように、頭を海と反対側に向け（捕鯨の成功を祈り）ベッドの中に留まり、捕鯨者が鯨を引いてくると、謡って歓迎し、感謝を

捧げる。

以上のことから、西海岸沿いの魚漁の共同体は「空と地上」の相克の視線とは異なる、外界との溶解によって、乖離する世界を融合する語り、即ち、二元論を実践的に克服する自然観（身体観）である。これらをまとめると、西海岸と東海岸に定住する部族の身体性の相違は、環境世界との「同化」を志向する文化と、メタレベルの視線によって、外界や他者と対峙し、自立を志向する文化の2つの相違が明らかになる。そこで、次に、北米東海岸に定住するアルゴンキン語族（Algonquian, -kin, -kian）の「球戯神話」を共時的に比較することが課題となった。

まず、南東部の比較には、①現在のジョージア州およびオクラホマ州におけるインディアン共同体のクリーク（Creek）またはムスコギー（Musukogee）のバージョン、②ノースカロライナ（NC）およびオクラホマ（OK）のチェロキーの物語の比較検討を行った（ノースカロライナのチェロキーはかつてオクラホマ保留地に強制移住させられ、その一部がノースカロライナに逃げ帰ったため、チェロキーの物語にはOK版とNC版がある）。また、③北東部、カナダ・オンタリオのオジブウェイ（Ojibway）にも球戯神話（ラクロス）があることが明らかになり、南東部の中での相違、ならびに北東部との差異も検討された。即ち、①ムスコギーと、②チェロキーの物語では、空と地上の異なる視線から生まれる信念対立の構図は一致し、あらゆる鳥や獣の登場から生態系のシステムを学び、環界によって生かされ、環界を守る「環境世界内存在」が描かれる。多くの生き物の名前を覚え、チームワークやフェアプレイという集団の秩序付け、意味づけのレッスンが教えられる点も共通する。

カナダ・オンタリオ州の物語は、「鳥」は

鳥のグループ、獣は獣でプレイする仲間を見つけあうが、物語は「空の鳥と水鳥」の試合である。「俯瞰的な視線」と「実存の眼差し」は変わらず、狡猾な「渡りがらす」が両義的に関り、ペナルティは北風が吹くと敗者は土地を離れるべしという生態系の意味付けが語られる。

以上をまとめると、球戯神話の環境内存在では、乖離する世界を融合し、チームを勝利に導く為「両義的存在」が重視される。即ち、南東部の物語では、俯瞰的な見方のできる鳥が賢い存在であり、空の鳥のキャプテンは鶴（モスコギー）、梟や鷲（チェロキー）である。それに対して地上のキャプテンは、ユニバーサルな本質を志向するよりも、他者への配慮ができる現実存在である熊が選ばれる。しかし、鳥か獣か、空か地上か、どちらに勝たせるかの選択は、地域ごと時代ごとに変化するよう、そこには恣意的に選択される観念、即ち、どちらを大事に見るかという意味をめぐる闘争の観念形態が存在する。オクラホマに移住させられたチェロキーの物語は、鳥が勝利し、東部ノースカロライナのチェロキーでは獣が勝利し、結末が異なっている。チェロキー版でも時代が異なると物語の結末が異なる通時的特徴が見出された。

James Mooney の報告(初出 1900)では、空の鳥が勝利する (*James Mooney's history, myths, and sacred formulas of the Cherokees*, 1992. pp.286-287)。なぜ時代によって、地域によって勝敗の結末が異なるかの理由は、物語の時系列の更なる比較検討が必要であり、今回の調査では未解決のまま残された。しかし、球戯神話をもついずれの部族にも、対称性の発想はなく、ゲームに勝利するのはコウモリのように翼手類の哺乳類で唯一よく飛ぶ存在が不可欠であり、このような自らの外に立つ視点と他者への配慮を

もつ共同体は、神と対峙し、自立を重視するヨーロッパ的な自然観・人間観が示唆される。さらに、今回の研究の対象外であるが、シャイアン族とスー族の物語にも、空の鳥と地上のバッファローを含む動物との競争レースの話があり、ここにも空と地上の2つの視線の類似性がある。

以上を整理すると、「球戯神話」は、カナダのオタワ、ケベック地方から、米国のカロライナ、大平原地方に至るインディアン部族の世界観をもつ、アルゴンキン語族系のインディアン人のレッスンである。そして、部族間内外の異なるコスモロジー（宇宙観、自然観）による覇権闘争を平和的に解決する知恵を内包する物語であることが明確になる。

ここに、共同体の信念がスポーツの形をかりて具現化される原初的な（哲学的）形式が発見されるとともに、他方、西海岸の捕鯨の部族には、修練の中で心身を訓練し、対象と「同化する」特性とともに、自らの身体にスピリチュアルものが宿る東洋の身体性との類似点が抽出される。

（3）イデオロギー性の解釈コード

最後に、共同体の価値規範の体現に使われる、パフォーマンスによるチェロキー族のアイデンティティ形成と自立への方途について調査した成果は、以下の通りである。

一般にパフォーマンスとは、大勢の人びとにダイレクトに訴える方法であるとともに、人びとに驚きやショックを与える方法である。自らの歴史文化や世界との関係を見直し、見方を変える身体表現は、個のアイデンティティと共同体の強化として働くが、その顕著な事例がここに見出される。

一般に、北米ネイティブの意識変革と文化機関の変革、即ち、自立の過程には次の4つの流れがある。①自然博物館の陳列棚に置かれた見られる対象、②展示品／見せ物として

の対象、③ネイティブ自身が表現の主体になる、④ネイティブ自身が収集コレクションの担い手・博物館の運営主体になる。ところでネイティブ共同体には文化を継承する仕組みが存在していたが、インディアン文化の制度化が1990年の返還法と共に活発化し、博物館の新しい規範の創出となっている。南東部チェロキーの場合は、上記の第4の過程である。野外ステージは2800席を用意する豊富なスペースと山間を上る田舎道を利用して建設計画が1948年に実施された。それが、近年、注目されるのは、2009年夏に60周年を迎えた野外パフォーマンスがイデオロギーの文化装置、即ち、共同体のアイデンティティ創出の場に変容しているからである。開設当初のスク립トは山の名前を生かした”Spirit of the Great Smokies”, “Unto These Hills (この丘に向けて)” (1950.7.1)であり、それはノースカロライナ大学の学生が執筆したものであった。山間の環境を生かして、毎年、夏の間上演され、1957年までに100万人の参加者を惹きつけ、主催者側の発表では、これまでに600万枚の切符が売れ、観客の3世代を楽しませてきている。その後、チェロキーの間に自尊意識、自文化に対する誇りが生まれ、正確な歴史典拠に従って、自らのオリジナル脚本で上演をという要求が生まれ、2006年からはチェロキー自身の歴史的視点から、舞台は全く新たに脚色されている。2008年夏は、チェロキー出身のEddie Swimmerが監督し、アメリカ史の中で、自らが経験した支配・被支配関係を他者の目に呈示する脚本となっている。つまり、外圧からの迫害を題材に、抑圧の歴史からの解放を、チェロキー自身が経験できるように、自らの歴史文化の経験が物語られるようになったのである。14の情景から成る「涙の旅路：The Trail of Tears」は、強制移住の歴史

物語であり、歌、ダンス、子ども達の球戯神話の情景が含まれる。伝統的なイーグルダンスは男性の踊り手が円陣を組んで演じられるが、若者によるモダンダンスも上演され、屋外環境を効果的に生かした伝統的なチェロキーの価値観と現代に生きる感受性が共存する内容である。パフォーマンスは、a. エンターテインメント性、b. スピリチュアル性、c. 共同体のアイデンティティ、d. 癒しの効果、e. 深層の伝達と自己変容、f. イデオロギー変容の文化装置、g. 聖なる要素が見られる。夏の間、昼と夜の二回上演される。上演のプログラムには、Uliheliadi! (Cherokee として!) が表示されている。

結語：北米ネイティブの物語から身体・スポーツ文化の根源的な本質特性が抽出された。

- (1) 西海岸沿いの共同体は、自然界と融合しつつ生活する生態系の守り手であり、外界との調和の身体性（環境世界内存在）が把握された。
- (2) 東海岸から中央部に至る「球戯神話」の世界説明をもつ共同体からは、闘争の場の止揚、共通理解に至る知恵、平和の強調（＝代理戦争）の概念が抽出され、スポーツ形式（文化）は、共同体の価値規範の体現として把握された。
- (3) 支配／被支配の抑圧関係（イデオロギー）を止揚するパフォーマンスは、個と集団の意味を語る場となっている。即ち、チェロキーに継承されるイデオロギー性は、人びとが提起する「できあがった構想」ではなく、支配層と非支配層の関係を意識した平和への希求を願う装置として、個人レベル・スポーツ文化レベル・社会的文化レベルと関わる「環界内世界存在」を創出している。それは現代のスポーツ文化のあり様を見直す一つの示唆となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①山口順子（2008）「国際ウェルネスと癒しのパフォーマンス：ネイティブ・アラスカンを事例として」平成15年度～平成19年度私立大学学術研究高度化推進事業津田塾大学オープンリサーチセンター研究成果報告書『世界諸地域における国際ウェルネス（福祉）／協力と多文化言語教育の推進現状に関わる研究』所収（査読無し）、pp.159-177.

〔学会発表〕（計 3 件）

① 山口順子「東洋のパフォーマンスと意識の階層性」『アジア体育人類学論壇論文集：体育・人類・文化』アジア体育人類学会、北京：清華大学、2009年11月21日-22日. pp.39-44.

②山口順子「北米東部チェロキー族におけるパフォーマンスと自立の過程」日本スポーツ人類学会第10回大会、東京：早稲田大学総合学術センター、2009年3月29日-30日.

③Yamaguchi, J. Cultural Sharing of Performing Bodies with Body-Mind Languages in Japanese (keynote) Proceedings for The 36th Annual International Association of Philosophy of Sport Conference for 2008., 9月12日-15日, 国立オリンピック記念青少年総合センター.

〔図書〕（計 1 件）

①山口順子「東西身体観の生成と仮想体験」『民族伝統体育発展論集』上海古籍出版社、2007年、pp.224-226（総頁：252）.

6. 研究組織

(1) 山口 順子(YAMAGUCHI JUNKO)
津田塾大学・学芸学部・国際関係学科・教授
研究者番号：70055325